

令和5年度学校評価報告書（実施結果）

視点	4年間の目標	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	総合評価(3月25日実施)	
	(令和2年度策定)		具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	(3月12日実施)	成果と課題	改善方策等
教育課程 学習指導	<p>①生徒自ら課題を設定し、課題解決に向けて主体的に探究することができる生徒の育成を図る</p> <p>②グローバル化が進む社会で活躍できる生徒の資質・能力の育成を図る。</p>	<p>①新教育課程の全実施に向けて、「指導と評価の一体化」の定着を図るとともに、履修指導を工夫し、生徒の希望進路実現を支援する。また、出欠管理を徹底し、進学に係わる事故防止に努める。</p> <p>②生徒が授業において一人一台端末を活用して、主体的でより深い学びができるように授業改善に取り組む。</p>	<p>①単元ごとに「指導と評価の計画」を作成して生徒に示し、見通しを持って学習の支援を図る。選択科目担任面談等を通じて、履修指導をきめ細かく行う。ICTの活用で生徒の欠席、欠時等を正確に把握、管理し、進学先提出書類を適正に作成する。</p> <p>②各教科で一人一台端末を活用した授業を実践し、教員間で共有化する取組を進める。一人一台端末を効果的に使用できるよう、職員研修を計画、実施する。</p>	<p>①単元ごとの「指導と評価の計画」を作成、公表し、計画的に授業を進められたか。選択科目説明会や担任面談等を通じて、きめ細かな履修指導を行えたか。ICTの活用で出欠管理を適正に行い、事故防止の取組ができたか。</p> <p>②各教員が一人一台端末を活用した実践できたか。実践成果を教員間で共有できたか。研修によって端末を効果的に使用できるようになったか。</p>	<p>①「指導と評価の計画」の作成で計画的に授業が進められ、生徒は見通しを持って授業に取り組めた。履修指導は説明会、面談等細かく行えた。出欠管理はICTの活用による管理システムの導入を果たした。</p> <p>②各教員が一人一台端末を活用できるようロイノートを導入した。また、校内で職員研修を実施し、活用方法を共有を図った。</p>	<p>①指導と評価の一体化に向け、「指導と評価の計画」の作成にとどまらず内容の充実、定着化が必要である。履修指導は継続してきめ細かく行う。出欠管理は職員がICT活用に習熟し、円滑に業務を遂行できる必要がある。</p> <p>②一人一台端末の更なる活用に向けた研修を行い、実践成果を共有する。生徒による授業評価を生かした授業改善に取り組み、端末の活用により深い学びが実現する授業づくりを推進する。</p>	<p>①大学生の地域活動を評価するイベントに関係して、平沼生にも参加、発言してもらった。発言の場を与えることは大事と考え、出欠管理には便利な機能であろうが、スマホを持たぬ家庭があると心配だ。</p> <p>②端末活用では一人ひとりの学ぶ方向を見定める必要がある。チャット系のツールの楽しさを知ると移行がうまく進む／主催した国際交流セミナーに平沼生の参加があり、グローバル化の進展に関する若者の意見が聞けてよかった。</p>	<p>①指導と評価の一体化の定着に向けて「指導と評価の計画」を作成し、生徒に示すことによって、生徒は見通しをもって授業に取り組めるようになり、教員も計画的に授業を進めることができた。新教育課程の十分な実現に向けて、きめ細かな履修指導を行った。出欠管理システムの導入など校務にもICTの活用場面が増え、職員は事故防止を念頭に適切に校務処理に携わった。</p> <p>②一人一台端末の効果的な活用を目指してロイノートの導入を図り、教員のスキルアップや授業改善につなげた。また研修会の開催、教科内での情報交換、総合的な探究の時間での利用などを通じて端末活用の裾野が広がられた。</p>	<p>①新教育課程の実施などにより課題解決に向けて主体的に探究する生徒の育成は進んでいる。今後も、計画的な指導と評価で探究による学びを充実させるとともに、履修指導や校務処理に一層の工夫を図ること、生徒の育成を広く支える必要がある。</p> <p>②一人一台端末の活用、ICT機器の整備をさらに進め、生徒一人ひとりが主体的に学習や活動に取り組む環境を整えるとともに、協働による学びの充実などの授業改善を一層進める必要がある。</p>
	生徒指導 ・支援	<p>①豊かな人間性やコミュニケーション能力、主体的に行動できる人格の育成を図る。</p> <p>②生徒一人ひとりの適切な理解に基づく生徒支援体制と教育・健康相談の充実を図る。</p>	<p>①生徒が主体的に活動し、幅広いコミュニケーションを通じて行きたる活動が実現できるよう、生徒会行事や委員会、部活動を支援する。</p> <p>②感染状況の推移を注視し、生徒へ情報発信する。学年、グループ、学校運営の各場面で生徒情報を共有し、生徒一人ひとりの理解に努める。</p>	<p>①生徒が主体的に、学年を超えたコミュニケーションをとって行事など活躍できるような活動に努める。特に委員長を中心に委員会運営ができるよう支援する。</p> <p>②感染防止対策や予防意識の変化に留意し、生徒が自らの健康に主体的に判断できるよう情報発信する。教育相談コーナーを中心に学年やグループ、養護教諭、SC、SSWの間で支援が必要な生徒の情報共有に努める。SSWの支援を受けながら、医療機関や児童相談所などの関係機関と連携を図る。</p>	<p>①生徒主体で行事を企画し、主体的に活動できる場面が増えたか。学年横断的なコミュニケーションは活発に行われたか。委員会運営を十分支援できたか。</p> <p>②生徒が自分の健康を意識し、健康的な生活を送るための支援はできたか。様々な生徒について、必要な情報を多く共有し、支援することができたか。SSWの活用が少なかったか。かながわ子どもサポートドックがスタートして関連作業は増えたが、担任等の生徒把握が容易になった。</p>	<p>①体育祭、文化祭ともコミュニケーションの意識づけは半ば達成され、学年を越え意識伝達する場面をよく見たがコミュニケーション不足の場面もあった。委員長を中心に主体的に活動が育まれた。</p> <p>②感染症対策についてはピーク時に比べマスク、手洗いの履行は減っているが、体調を日頃から意識する習慣は高まっている。教育相談体制についてはSC、SSWの来校増できめ細かな対応が可能となったが、SSWの活用が少なかった。かながわ子どもサポートドックがスタートして関連作業は増えたが、担任等の生徒把握が容易になった。</p>	<p>①教員が待ちで臨んだ結果、主体的に考え、学年を越え意思伝達する場面をよく見たがコミュニケーション不足の場面もあった。委員長を中心に全体で動くよう声掛けしたい。</p> <p>②新型コロナウイルスの5類移行で社会全体での予防意識低下が生徒に及ぼす影響を注視し、対応する。教育相談体制についてはSSWの有効活用に向けて潜在需要を掘り起こすとともに、かながわ子どもサポートドックについてもSC、SSWの協力でスクリーニングの技法を高め、利用価値をさらに高めていく。</p>	<p>①来校するたびに生徒から気持ちよく挨拶される。生徒中心の方向性は間違っていない／125周年記念式典でも生徒が活躍する場面があったらしい。</p> <p>②かながわ子どもサポートドックの制度はともよよいと思う。内に引きこもる子への対策もなる／同窓会では給付型の奨学金を今年度から始めた。生徒の支援に有効に活用してほしい。</p>	<p>①体育祭、文化祭などの行事を生徒主体で進めさせた結果、主体的に企画を立てたり、学年を越えてコミュニケーションを取り合ったりする場面が多くなった。リーダーシップ面でも、委員長の主体性を引き出す支援を行った結果、自ら考え、提案しようという意識を育むことができた。</p> <p>②新型コロナウイルスの5類移行などで起こった予防意識の低下傾向が生徒の行動にも影響しているため、情報発信や注視にもなる／同窓会では給付型の奨学金を今年度から始めた。生徒の支援に有効に活用してほしい。</p>

視点	4年間の目標	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	総合評価(3月25日実施)	
	(令和2年度策定)		具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	(3月12日実施)	成果と課題	改善方策等
進路指導・支援	①生徒自らが進路を開拓・選択する力を培うとともに、第一希望の実現をサポートする。	①3年間を見通した進路指導計画に則り、組織的な進路指導を行い、生徒が自ら希望する進路を見出し、その希望する進路を実現するための手立てを実践する。また、3年生に向けた受験直前の支援を充実させる。	①卒業生の話や外部講師活用による各種講演会等によりキャリア教育の充実を図る。ハイレベルな学習スキルを養い、応用力の育成を図るなどHi-ゼミ活用を一層の充実を図る。3年1月のスタディショップは参加向や生徒のニーズ面で再検討する。総合型選抜で小論文が必要な生徒が増えているため、小論文対策を行っていく。	①年度末に各学年に行う進路指導の満足度や必要能力が身についたかどうかの調査で、各回答が85%を超えた。Hi-ゼミの充実が図れた。スタディショップについて、生徒にとって魅力的なものになっていった。進路グループが主体となって小論文対策を行えた。外部の小論文対策講座を十分に案内できた。	①卒業生の話や外部講師活用による各種講演会は無事終了し、キャリア教育の充実が図られた。Hi-ゼミ活用は、27講座開講で半ば達成できた。3年1月のスタディショップは見直して実施したところ、好評であった。小論文対策は対策講座を全2回実施し、延べ31人の参加で目的は概ね達成された。	①卒業生の話や外部講師活用による各種講演会は生徒の評判も良好であり、要望を取り入れ更に充実させる。Hi-ゼミ活用は教員の負担過重に配慮し引き続き実施する。見直しをした3年1月のスタディショップは次年度も実施していく。小論文対策の実施については、利用拡大を図る。	①Hi-ゼミは生徒にとっても重要な役割が大きいので、協力できることがあれば役に立ちたい/3年生の子どもの様子を見ていると、学校の指導が行き届いているのか、自分で受験スケジュールを組み、親の出番が少なくなってきた/共通テスト後の講演会に信頼できるプロフェッショナルのアドバイスなのでよかった。できればもう少し早く聞きたかった。	①卒業生の話や外部講師による各種講演会など、生徒が自ら希望する進路を見出すための機会を十分確保し、支援に努めることができた。Hi-ゼミでは年間を通じてハイレベルの講座を用意し、また進路相談に特化した講座も用意するなど希望進路の実現に向けた支援を充実させた。参加率の低下が見られていた3年1月のスタディショップについては、今年度見直して新形式で実施したところ、生徒から高評価を得た。小論文対策講座の参加状況も上々であった。	①卒業生の話や外部講師による各種講演会など、生徒が自ら希望する進路を見出す機会を広く確保されている。来年度もそれぞれの内容をブラッシュアップし、自分の適性や将来の目標に合わせて進路を考えられるようキャリア教育の充実を図る。3年生を対象とした受験前の支援については、今年度見直した1月のスタディショップを来年度も継続実施し、小論文対策講座は告知を工夫して一層の充実を図る。
	①PTAや地域との連携事業を推進し、地域とともにある学校づくりを推進する。	①PTAとの交流・連携事業について、新たな取組みを実現する。また、コロナ禍以降の地域のニーズを反映させた、新たな地域連携を推進するとともに、地域貢献活動や他の学校などとの交流を継続する。	①コロナ禍で見直しが進んだPTAの活動形態を踏まえ、十分な協力体制で交流・連携事業を進める。学校運営協議会を通じて地域ニーズを把握し、今後の地域連携を計画、推進する。地域清掃、地域イベント、学校交流に積極的に参加させ、生徒に社会参画の意義を実感させる。	①PTAとの交流・連携事業について、新たな取組みは実現できた。地域のニーズは把握できた。新たな地域連携は推進できた。生徒の社会参画の意識は向上した。	①PTAの新規事業として、学校内での保護者が講師として講演会を実施した。コロナ5類移行でPTA参加企画にも販売等を加えられた。地域ニーズの把握と地域連携の計画、推進は例年以上の関係機関を通じた地域貢献活動や多様な生徒参加イベントへの呼びかけで関心を高めることができた。	①PTA企画についてはより多くの人数が参加できるものを検討する。地域貢献活動については場所を増やしたことで生徒の関わりにも多様な意識や自己肯定感の向上につながった。1年生以外も参加の道を考える必要がある。生徒の交流行事は一層活発なものを目指し、意識向上を図りたい。	①中地区PTAの会合では会費の使い方が話題になり、もっと生徒に還元してほしいという意見があった。見直しの好機ではないかと西口エリアの改善や活用で期待されている。いい方向に変えるには人とソフトが重要。来年度はさらにいろいろ協力していただきたい。	①コロナ禍で停滞していたPTA活動が、学校行事への参加再開や新規事業の開始などによって再び活性化し、学校と保護者との繋がりが深まった。学校運営協議会委員の紹介や地域の依頼で西口エリアを中心に新たな連携が生まれ、生徒が活動する機会が増えた。新規の学校交流として分教室とポッチャ体験会を始めた。1年生の地域貢献活動は活動場所を増やし、生徒の多様な興味への対応に努めた結果、市の防犯協会から表彰されるなどその活動が地域から認められた。	①PTA活動の多くは人数制限があり、実施規模や人数について検討する必要がある。地域との連携については、引き続き西口エリアを中心として様々な活動に参加させるとともに、西区制80周年イベントへの参加など地域自治体との連携、協働を進め、生徒の社会参画意識の向上を図る。地域貢献活動については、現在1年生のみの活動であるが、他学年にも活動を広げられないかを検討する。
学校管理 学校運営	①大規模災害に備え、職員・生徒が協力して行動できる体制を整える。	①大規模災害に備えて学校防災活動マニュアルの見直しを図る。防災に向けて職員、生徒、近隣住民が協力して行動できる体制づくりを進める。	①学校防災活動マニュアルの整備は進んだ。大規模災害を想定した防災訓練などを実施することはできた。生徒は通学経路の危険箇所を認識できた。協定マニュアルの整備を進め、周知を図ることはできた。	①学校防災活動マニュアルについては変更点を整理して整備を図った。防災訓練については2回、学年別に目標を変え、DIG等の防災教育の趣旨も取り入れて行った。協定細目に基づくマニュアル整備は着手できなかった。	①マニュアルについては常に最新の情報を取り入れて整備する。防災訓練については次年度以降もテーマや内容をよく吟味して実施し、防災意識の向上を図る。協定細目に基づくマニュアル整備については地域と連携、相談を図り着手する。	①補充的避難所である本校を9月に見学し、夜間の避難やバリアフリーへの対応などを確認し、声がかかった。帰宅困難者など様々な役割を担うが、地域住民の妨げにならないか不安がある。	①学校防災活動マニュアルの整備、防災訓練及び訓練に合わせたDIG等の防災教育、生徒用の防災備蓄品の選定、管理、更新が適切に行われた。補充的避難所を運営する市との協定に基づいたマニュアルの整備は着手できなかったが、要請を受けて避難場所の見学会を実施したところ、地域住民から意見を聞くことができた。	①学校防災活動マニュアルを不断に見直すことに加えて、危機管理マニュアルについても同様に検討する必要がある。横浜市の協議や地域住民の意見、要望も踏まえて、補充的避難所、一時滞在施設、津波避難施設という本校の3つの役割をよく整理し、職員に浸透させていく必要がある。	
	②生徒と向き合う時間を確保するため、教員の働き方改革を推進する。	②業務の効率化、業務時間に職員が協力して取り組む、タイムマネジメントの意識の醸成を図る。	②リーダーを中心にグループ業務均分化を図る。部活動指導の組織化に向けて顧問の協力体制を強める。業務の見直し、会議設定の工夫などを通じて時間外労働の削減を図る。	②グループ業務の均分化は進んだ。組織的な部活動指導体制は進んだ。時間外労働の削減は進んだ。	②グループ業務については各グループが役割分担の適正化に取り組んだ。部活動指導は顧問調整等を通じて時間外労働の削減については管理職から働きかけた。	②グループ業務は分担見直しを常に行い、リーダーが適切に進行管理する。一部顧問への業務過多に留意する。時間外労働の削減は勤務時間管理システムを活用し、管理職の声掛けを続ける。	②働き方改革では中学校でも残業が多く、苦業の中には納得して共有できないことがストレスとなる者もおり、ブレーキのかけ方が難しい。よい工夫はないか高校と情報交換を進めた。	②リーダーの進行管理のもと、進捗状況や不明点を確認し合い、記録や情報をアップロードして共有し合うことで業務の均分化、適正化が進んだ。部活動指導については、顧問同士や部活動間の協力で指導体制の維持、確立を図った。時間外労働削減については、勤務時間管理システムを活用し、勤務過多の職員に改善を働きかけた。	②グループ業務の均分化については引き続きリーダーを中心に実行する必要がある。部活動指導については、「神奈川県立の学校部活動に関する方針(改訂版)」を踏まえて、適切な休養日設定が必要となる。時間外労働の削減に向けては、管理職による職員への声掛けなどを通じて、職員のタイムマネジメント意識の醸成を図る必要がある。